

天台智顛より見た三論

林 瑞 蘭

はじめに

本稿は天台智顛の文献中に見える三論に対する言及を取り上げて検討し、智顛の三論に対する態度について考えたい。三論の文献中、特に吉蔵の著作中では天台について言及することが極めて少ない⁽¹⁾。しかし、逆に智顛の晩年の著作とされている現存の『四教義』『三觀義』『維摩經玄疏』『維摩經文疏』などには、吉蔵以前の三論についての言及がある。これらの智顛による言及については、すでに先行研究として大野栄人氏の業績があり⁽²⁾、おおよその検討がなされている。本稿では、その大野論文の成果を踏まえ、天台の三論に対する言及を補遺的に取り上げて、別な角度から検討したい。

一 『維摩經文疏』にみえる言及

『維摩經文疏』は智顛が最晩年に晋王広に献上した維摩經疏の一部をなすものである。佐藤哲英氏の研究によれば、晋王

広への維摩經疏の献上は三回にわたり、智顛寂後の三回目⁽³⁾に『維摩經玄疏』六卷、『維摩經文疏』二十五卷が献上されたとする。また現存『維摩經文疏』二十八卷は、門人灌頂が後に三卷を加えたものであるという。『維摩經文疏』中の三論についての言及は、管見の及ぶ限りでは六例ある。大野博士の取り上げられていない四例を以下に列举する。

①此是四明空中声勸捨女也。空中声者関河旧解云。是化魔菩薩因機助化。汝向欲施持世。今浄名素何得不与与之。不違本心。乃得去耳。或是浄名空中作声。為調伏魔。或釈迦法身毗盧遮那之声。如普賢經所明也。
〔新纂統蔵〕一八、六〇一頁中

『維摩經』の菩薩品の「即聞空中声曰。波旬。以女与之乃可得去」(『大正』一四、五四三頁上)の文に対する解釈部分である。ここでは「関河旧解」とある。平井俊栄氏によれば、「関河旧解」とは、関中長安の僧叡と河西道朗の説を指し、関内、関中と称する場合は、長安の羅什とその門下を指すとされるので⁽⁴⁾、ここでも僧叡と河西道朗の説を指すのであろう。

②此是第二述不堪之由。由於父舍設大施會。供養一切。期滿日不知
 法施之會也。所言父舍者。是善得父祖。相乘旧所居住之處。故言父
 舍也。設大施會者。関河旧解云。其家父祖邪見。世代恒修邪祠祭祀
 神祇。下祠用羊。中祠宰牛。上祠用人。善得既是菩薩。教化其父回
 邪入正。絶此邪祠。勸修正道。行真檀施。其家大富。四事豐有。故
 營斯大会。供養一切出家在家内道外道及諸貧賤。來者無隔。供給所
 須。期滿七日也。
 (同、六〇四頁上—中)

この文は、『維摩經』の菩薩品の「所以者何。憶念我昔自於
 父舍設大施會。供養一切沙門婆羅門及諸外道貧窮下賤孤独乞
 人。期滿七日」(『大正』一四、五四三頁下)に對する解釈部分
 で、「関河旧解」として長者子善得が設けた大施會についての
 解説を出している。僧叡、河西道朗らの解釈ということにな
 るが、かなり具体的に大施會について記している。『注維摩』
 に羅什の解釈として「什曰。大施會有二種。一不用礼法但広
 布施。二用外道經書種種礼法祭祀兼行大施。今善徳礼法施也。」
 (『大正』三八、三六七頁下)とあるが、例文の解釈ほど詳細では
 ない。智顛在世当時、僧叡あるいは道朗などの經の講説録な
 どが存在していた可能性を窺わせる。

③明室有天女現身者。関河解云。此是淨名宅神守護方丈。聞法歡喜
 現身供養也。今解此是大慈法身。影響淨名。共弘大道。本地与淨名
 同。
 (同、六五二頁下)

ここでは「関河解云」として、天女は維摩の家の守護神と

天台智顛より見た三論(林)

いう解釈を示している。それに対して「今解」として、天女
 は大慈法身であり、本地は維摩と同じだという解釈を示して
 いる。この解釈は『注維摩』中の「肇曰。天女即法身大士也。
 常与淨名共弘大乘不思議道。」(『大正』三八、三八七頁上)とほ
 ぼ同じである。智顛は僧肇の解釈に依っていると考えられる。
 とところが、「関河解」とは僧叡、道朗を指すということである
 から、同じ羅什門下でも僧叡と僧肇とでは解釈が異なってい
 たのであろうか。

④正為人假分別。故約法門明於眷屬也。若関河旧解。外国無父母宗
 親眷屬。非為貴人。今約此解仍為理釈。言無眷屬是賤人者。即是二
 乘見偏真灰斷。無智度母善権父万行功德眷屬也。故法華經以窮子譬
 也。若是大乘法身。眷屬臣佐吏民倉庫衆多為譬也。淨名具此。即是
 仏法貴人。
 (同、六六九頁中)

この例文では「関河旧解」として、眷屬に對する僧叡ある
 いは河西道朗の解釈を紹介している。現存の三論関係の諸注
 釈中には管見の及ぶ限りでは同様の解釈を見いだせなかった。
 智顛の時代には何らかの講説書あるいは疏などが存在してい
 たのではないかと思われる。

以上、『維摩經文疏』の六例中の四例を挙げたが、三論の人
 師の呼称は、ここでは①②「関河旧解」、③「関河解」、④「関
 河旧解」である。平井俊栄氏による吉藏の用い方によれば、

①から④までは僧叡、河西道朗(あるいはそのどちらか)を指す

ことになる。『維摩經文疏』中の六例の三論説の紹介で特徴的なことは、時代的には羅什門下の人師から撰山三論の法朗までに限られていて、同時代の三論人師の説が挙げられていないことであろう。これは『維摩經文疏』だけではなく、智顓著作の三論引用のすべてについて言えることである。

また、三論説の引用の、特に②の例などの内容からみると、三論の人師たちの經の講説録のようなもの、あるいは、疏が智顓在世当時存在していたのではないかと推測される。

二 『維摩經玄疏』『四教義』『三觀義』における言及

『維摩經玄疏』と『四教義』『三觀義』は、いずれも智顓の晩年の著作で、前者は晋王広への第二回目献上本の一部、後二者は第一回目献上本『玄義』十巻の部分成すものであった。この三書中における三論への言及については、すでに大野論文において検討されているので、ここでは引用文のみを挙げる。

ア、『維摩經玄疏』

- ⑤若不取四辺之定相即是無相三昧入実相也。若爾豈全同地論師用本有仏性如閻室瓶盆。亦不全同三論師破乳中酪性畢竟尽淨無所有性也。（『大正』三八、五二八頁中）
- ⑥次此下明四教所詮約諸教立義。其尋覽者則知与諸禪師及三論師破義及立義意不同也。（同、五三四頁上）
- ⑦第一釈不思議解脱名者：（中略）諸法師解釈乃

多。今略出七家不同。一者什法師云。不思議解脱者三昧神通之名也。二生法師解云。不思議解脱者莫測之用也。三肇法師解云。不思議解脱者幽微難測出二乘之境名不思議。塵累所不能拘名為解脱也。四闕内旧解不思議解脱云。六地断結与羅漢齊功。七地侵除習氣。八地習氣都尽道觀双流名不思議。正習俱尽名為解脱也。近代南土諸法師解不思議解脱。終傍前解釈雖復小異大意終自是同。今不具述。（同、五四九頁中）

⑧此相離解脱即是不思議解脱也。七三論師云。若他明縛脱。縛是自縛。脱是自脱。即是自性之縛脱。此非假縛脱。不得是非縛非脱之縛脱。此非不思議之解脱也。（同頁下）

⑨四闕内旧解不思議解脱八地習氣都尽道觀双流名不思議解脱者。亦是通教慧行行意也。（同右）

⑩六真諦三藏意同地論別教。七三論師釈解脱。雖作假名虚玄之語。宗旨莫知所趣。（同、五五〇頁上）

⑪三明不定教者。亦不同旧解別有遍方不定之説。今但於五味教内利根之人不同教教悉皆得見仏性。故有満字之義。故涅槃經云。譬如有入置毒於乳乃至醍醐亦能殺人。所以梁武流支撰撰山三家此經大品皆是満字明仏性弁常。意在此也。（同、五六二頁上）

次に『四教義』中の言及を四例、ここも紙幅の都合上、文例のみを挙げる。

イ、『四教義』

- ⑫經教者。問曰立四教名義。若無經論明文。豈可承用。答曰古來諸師講説。何必尽有經論明文。如開善光宅五時明義。莊嚴四時判教。地論四宗五宗六宗。撰山単複中仮。興皇四仮並無明文。皆是随情所立助揚仏化。（『大正』四六、七二三頁上—中）
- ⑬前明三觀豎破諸法。略為數十番。其尋覽者則知。与諸禪師及三論師所説意有殊

也。(同、七二五頁上) ⑭三用四悉檀起別教四門者。不生不生不可説。以四悉檀因緣故。得赴緣起教説四門也。但地論師明。阿梨耶識是如來藏。即是用別教有門。入道三論人云。汝是不見真空亦是水義。三論師明諸法畢竟無所有。(同、七三〇頁下) ⑮若方便。即墮有無中也。但脱諸三論師。或云。道非有非無。何必毘曇見隣虛細色有得道也。(同、七三六頁中)

以上、『四教義』中の三論に対する言及を挙げたが、三論の呼称として「撰山」と「興皇」、「三論師」、「三論人」を出している。

『三觀義』には一例のみである。その例文は三三昧の無相三昧の解釈で、『維摩經玄疏』の⑤の例文とほぼ同内容であるので割愛する。

三 小結

上來、智顛著作中で「三論」「三論師」「関河旧解」「撰山」などとして紹介される所説について検討したが、それらは前期時代の著作中にも、また三大部中にも見られなかった。今回検討したものが智顛最晩年の維摩經疏の一部をなすものであった。このような引用状況からすると、智顛によって三論が批判の対象として明瞭に意識されるようになったのは、智顛の晩年になってからのことではないかと考えられる。

また、引用の内容を見ると、引用は吉蔵以前の三論諸師に

天台智顛より見た三論(林)

限られており、批判の対象として挙げられているものが多い。また、『維摩經』の經文解釈などの場合には、紹介された解釈の内容が具体的で、詳細なものがあり、特に吉蔵以前の三論師たちの講説録あるいは疏が存在していた可能性が大いに考えられる。⁽⁵⁾

1 平井一九八五、九頁。 2 大野(平井監修)一九九〇、三一―三四頁。 3 佐藤一九六一、四四―四四八頁。 4 平井一九七六、六六―六九頁。 5 高野山大学における日本印度学仏教学会第六十六回学術大会(平成二十七年九月二十日)で、菅野博史氏から、三論の『維摩經』解釈内容が智顛、吉蔵当時の仏教界において共通認識になっていた可能性があるのではないかとのご指摘を受けたが、脱・縛について議論はその可能性があるが、例文②にみえるような「大施会」の具体的解釈は、疏のようなものの存在があつて初めて記述可能であろう。

〈参考文献〉

- 平井俊栄『中国般若思想史研究』(春秋社、一九七六)
平井俊栄『法華文句の成立に関する研究』(春秋社、一九八五)
大野栄人「天台文献にみられる吉蔵以前の三論教学」(平井俊栄監修『三論教学の研究』春秋社、一九九〇、三二―三四頁)
佐藤哲英『天台大師の研究』(百華苑、一九六一)

〈キーワード〉 智顛、三論、三論師、『維摩經文疏』

(立正大学大学院)